

新しい農業目指す

植物工場の竣工式を開催

ベジタブルテック

ベジタブルテック(那珂市、植田一成代表取締役)は16日、那珂市後台に県内最大級の第二工場が完成し、現地で竣工式を開催した。式典には来賓や工事関係者、工場の関係者ら約50人が出席して参加者全員で新工場の門出を祝った。第二工場は完全人工光型植物工場で、独自開発の送風システムを取り入れ、大株レタスの栽培を行う。

竣工式では神事のおとテーパーカットセレモニーに移り、植田代表取締役があいさつ。「昨年5月に第一工場が稼働開始し、手探りのなか多くの皆さまの温かいご指導をいただきながら、社員一人丸となって作業に邁進してきた」と関係者らに感謝の意を表した。続けて、「不安定で不透明な時代に工場を建設することは容易なものではな

ったが、このような時代だからこそ、将来を見据えて第二工場の建設に着手した。その結果、第一工場の約2倍となる施設を建設することができた。新工場の完成を契機に安心・安全・安定した生産で、新鮮な野菜を皆さまのもとへ届けられるよう、社員一同新たな気持ちで取り組みたい」と意気込みを語った。

山弘志衆院議員と上月良祐参院議員、大井川和彦知事、海野透県議、先崎光那珂市長が祝辞を述べた。このうち、梶山衆院議員は「植物工場のような次世代型の施設が普及するために国もしっかりいきたい」と話した。上月参院議員は「農業には多様性が必要。災害が多発するなか新たなビジネスモデルを構築して

ほしい」、大井川知事は「植物工場は未来の農業といえる。新しい農業で『儲かる農業』を目指してほしい」、海野県議は「電気工事業という全く違う分野からの参入に、勇気と決断、実行力に敬意を表したい」、先崎那珂市長は「植物工場の建設により雇用の創出や地

域貢献が図られ、市としてもありがたい。県北地域の発展には政治の力が必要で、これからも協力していきたい」などと祝辞を述べた。

このあと、植田代表取締役から建屋の建築を担当した大和ハウス工業取締役常務執行役員の浦川竜哉建築事業本部長と、関係者らによるテーパーカットのあと、つくば電気通信(土浦市)の植田利収代表取締役があいさつし、「植物工場は生産効率が高く、天候に影響されることがない新しい農業。この地域において新しい農業を確立し、植物工場を那珂市のブランドとし、茨城県のブランドへ、日本のブランドへと発展させていきたい。異業種からの参入だったが、工場の計画段階からご協力いただいた皆さまに感謝したい」と述べた。



植田一成社長



植田利収社長



梶山衆院議員



大井川知事



竣工を祝って関係者らでテーパーカットした

ベジタブルテックは、つくば電気通信を親会社とするグループ会社。電気・電気通信事業で培ったノウハウを活かして、完全密閉型の野菜作りへ新規参入するために18年



ベジタブルテック第二工場

1月に設立。農業を通じた新たな挑戦に取り組んでいる。主に首都圏のコンピューストアや飲食チェーン向けの業務用の大株レタスを栽培している。昨年5月には那珂

市堤に第一工場(S造平屋1980㎡)が竣工。1日に最大1280キログラムのフリルレタスとグリーンリーフを生産・出荷している。第二工場は、那珂市後

台の9985㎡の敷地に建設し、建屋の規模はS造平屋4938㎡。生産量は1日に最大2268キログラムで、第一工場の約2倍の生産が可能で、工事費には約22億円を投じた。工場ではLED照射や空調管理、養液管理など高度な衛生管理を行い、野菜に付く生菌数を抑えて日持ちの良い安全安心な野菜を提供する。このほか、第二工場では独自に開発した送風システムの導入により、第一工場より生育期間の短縮が図られる。また、新たに約60人の雇用を創出する見込みだ。

第二工場はこれらの先進設備を備えており、第一工場と合わせた生産量は1日に最大約3500キログラムで、北関東最大級となる。また、同社では市内に第三工場の建設も計画しており、25年の完成を目指して事業を進めていく考えだ。